

令和7年 12月1日	農作物病虫害発生予報 12月	山口県病虫害防除所
---------------	-------------------	-----------

～目 次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病虫害】	2
	【その他の病虫害】	5
III	参考(予報の見方、気象予報)	6

I 予報の概要

農作物名	病虫害名	予想発生量	現 況	
			平年比	前年比
イチゴ	灰色かび病	やや少	平年並	多
	うどんこ病	少	少	少
	アブラムシ類	多	多	多
	ハダニ類	平年並	平年並	前年並

お問い合わせ先

山口県農林総合技術センター(山口県病虫害防除所)

TEL (0835) 28-1211 (代)

FAX (0835) 38-4115

E-mail a172011@pref.yamaguchi.lg.jp

Ⅱ 予報 【主要病害虫】

イチゴ

1 灰色かび病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	平年並	多	発病初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%(平年3.8%)、発病株率0%(平年0.1%)、発病果率0%(平年0.0%)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、気温は平年並か低い、降水量は少ない、日照時間は多い(ー)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

ア 多湿条件で発病が助長されるため、換気等により施設内が多湿にならないよう努める。

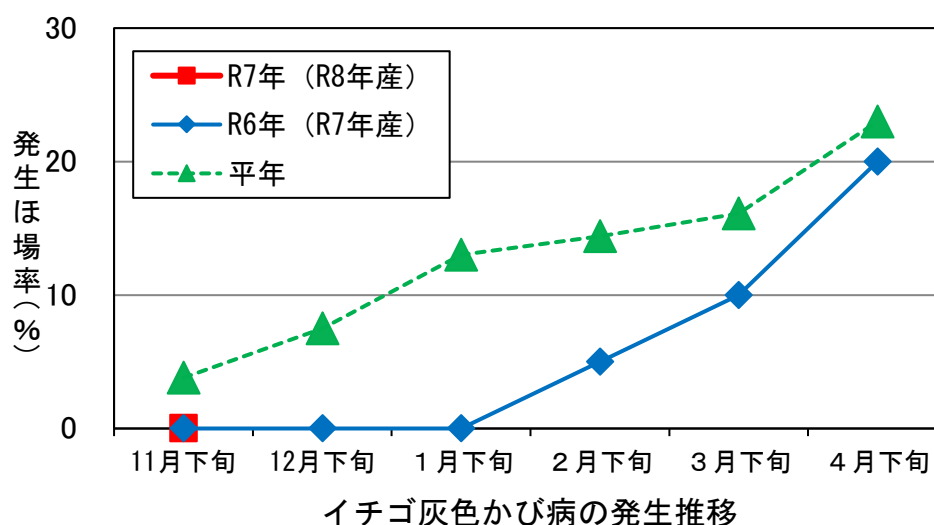
イ 被害果等は伝染源となるので、早期に取り除き、ポリ袋等に密封してほ場外に持ち出し、焼却や土中に埋めるなど適正に処分する。

ウ 窒素過多による軟弱、過繁茂な生育が発病を助長するため、適正な施肥管理に努める。

<防除のポイント>

ア ペンチオピラド剤(アフェット)、アゾキシストロビン剤(アミスター)、ポリオキシシン剤およびジカルボキシイミド剤(スミレックス、ロブラール)は耐性菌が出現しているため、薬剤散布後に防除効果が劣る場合は他の薬剤を使用する。

イ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。



2 うどんこ病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
少	少	少	発病前、発病初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0% (平年12.5%)、発病株率0% (平年2.8%)、発病葉率0% (平年0.8%)、発病果率0% (平年0.3%) で平年に比べ少なかった (一)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

被害茎葉、被害果は伝染源となるので、施設外に持ち出し処分する。

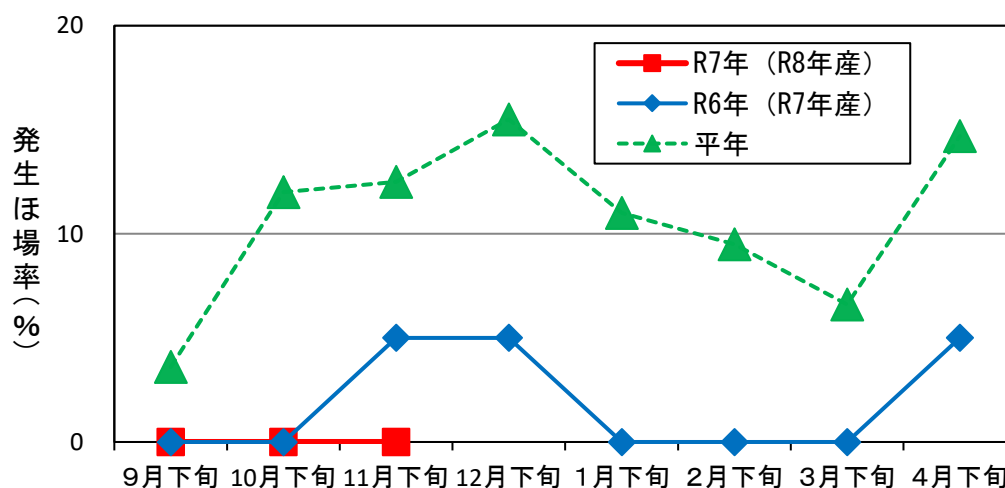
<防除のポイント>

ア 本病は、発病初期には葉裏に発生しやすいため、葉裏をよく確認し、早期発見に努める。

イ 予防防除と発病初期の防除に重点をおき、薬液が葉裏や新芽にも十分かかるよう、古葉を除去して丁寧に散布する。

ウ 薬剤散布後は防除効果を確認し、その後も発生が認められる場合は約7日おきに1～2回薬剤を追加散布する。また、アゾキシストロビン剤 (アミスター) は耐性菌が出現しているため、防除効果が劣る場合は他の薬剤を使用する。

エ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。



イチゴうどんこ病の発生推移

3 アブラムシ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率45.0%(平年28.4%)、寄生株率14.6%(平年5.5%)で平年に比べ多かった(+)。

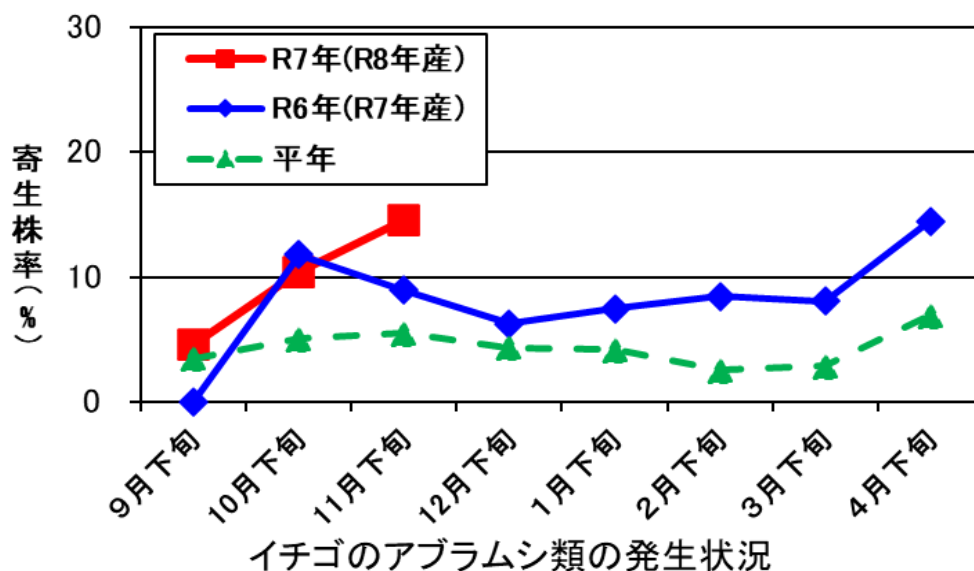
イ 気象予報では、気温は平年並か低い(-)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 薬剤散布時は、葉裏までムラなくかかるよう十分な量の薬液を散布する。

イ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。



4 ハダニ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	発生初期

(2) 予報の根拠

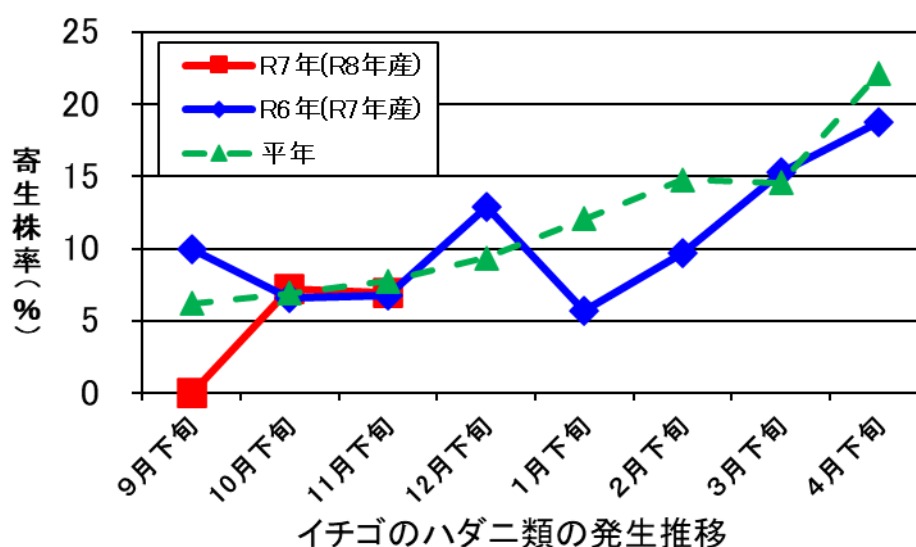
ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率30.0%(平年24.0%)、寄生株率6.9%(平年7.8%)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、気温は平年並か低い(-)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

- ア ほ場をよく観察し、発生を認めたら直ちに防除を行う。
- イ 薬剤防除の前には、薬剤が葉裏まで十分かかるように下葉を除去する。また、除去した下葉は、ほ場外に持ち出し適正に処分する。
- ウ 気門封鎖剤を使用する場合は、その多くがハダニ類の卵には効果が低く、残効性がないため、7～10日間隔で散布する。
- エ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。化学農薬に対する抵抗性が発達しているため、散布後に効果を確認し、十分な効果が認められない場合は、気門封鎖剤を中心に防除を行う。
- オ 天敵（ミヤコカブリダニ）は次のことに注意して使用する。
 - （ア）ハダニの発生前、または天敵に影響の少ない薬剤でハダニ類の密度を低下させた後、放飼する。
 - （イ）天敵を放飼した後は、天敵に影響の少ない薬剤（マイトコーネ剤、ダニコング剤、スターマイト剤等）を使用する。
 - （ウ）硫黄のくん煙は1日2時間程度とする。
- カ 開花期以降の薬剤散布は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。



【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年(%)	平年(%)	
イチゴ	アザミウマ類	平年並	平年並	前年並	10.0	13.1	
	コナジラミ類	少	少	少	0	16.9	

Ⅲ 参考

1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並	平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少	平年並の外側20%の度数の入る幅
少	やや少ないの外側10%の度数の入る幅

注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	前年の評価より少ない発生
前年並	前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 病虫害発生時期の基準（原則として過去10年間の発生時期と比較）

早 い	過去10年間の平均値より6日以上早い
遅 い	より6日以上遅い
やや早い	より3～5日早い
やや遅い	より3～5日遅い
平年並	を中心として前後2日以内

(3) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1 か月気象予報（11月27日福岡管区気象台発表）

予 報	低 い (%) 少ない	平年並 (%)	高 い (%) 多い
気 温	4 0	4 0	2 0
降 水 量	7 0	2 0	1 0
日照時間	1 0	2 0	7 0

週ごとの気温傾向

予 報	低 い (%)	平年並 (%)	高 い (%)
1 週 目	2 0	5 0	3 0
2 週 目	5 0	4 0	1 0
3～4 週 目	3 0	4 0	3 0